生成文法におけるデータ・モデル・理論

中条　太聖（Taisei Chujo）

京都大学・日本学術振興会

理論言語学の一つである生成文法(Generative Grammar: 以下 GG)は、われわれ人間の脳内にある言語固有のシステムについての理論を得ようとする自然科学である。GG を自然科学とみなす理由の一つは、母語話者がある文に対して下す直観的な容認性判断(acceptability judgements)という経験的なデータに基づいて、理論構築が行われることにあるだろう。本発表は、GG の科学的営みを記述することを目的のもと、こうした判断データの果たす役割、客観性について、モデル科学の観点から分析を与える。

GG の理論は---少なくともその初期(Chomsky 1955/1975, 1965)においては---可能な記号列全体の中から、ある言語において文法的な文の集合を非文法的な文から区別する装置/関数を構成することを目的とする理論であるといえる。換言すれば GG 理論は文法的文の集合を特徴づける「文法性」(grammaticality)という性質を規定する装置の理論である。GG の研究では、文法性はある意味でのわれわれ母語話者が持つ容認可能性についての直観に対応すると考えられている。

容認可能性判断とは、ある文がしかじかの解釈で読めるかどうかについての判断である。例えば次の文を考えよう。

(1) What does Anne know that Bill saw?
(2) What does Anne know who saw?

(1)の文についての下される判断は、「Anne は Bill が何を見たのか知っているか」という解釈のもとで(1)を読むことができるかどうかについての判断である。(2)について求められるのは「Anne は誰が何を見たのか知っているか」という解釈のもとで読めるかどうかについての判断である。英語母語話者は(1)は付される解釈のもとで読めるが、(2)はそうした解釈で読めないという判断を下すようだ。GG の理論はこうした容認可能性判断の差を、文を構築する演算操作と演算にかかる制約という統語的規則によって説明する。初期 GG の理論では、wh 節内からの抜き出しを制限する条件(島の制約)によって(2)が容認不可能性であるという判断、すなわち、(2)の非文法性を説明する。

判断から統語規則を直ちに導くことには疑念が生じる。容認可能性判断は、音韻的要因や意味内容的要因、短期的記憶や注意力などさまざまな要因が関与していると考えられる。つまり、母語話者の下した判断は、文法性以外のさまざまな交絡要因が潜んでおり、それを適切にフィルターする必要がある。また、母語話者は「文法性」についての判断を下すことはない。というのも、一部の研究者を除いて、われわれは島の規則などの統語規則についての直観を持ち合わせていないからである。容認性判断から GG の理論を得ることは如何にして果たされるのか。

データと理論とは直接的に結びつけられるのではなく、現象が介在して両者は関係を持つ(Bogen and Woodward 1988)。この考えに基づいて GG を見ると、判断データから生み出されるものは理論それ自体ではなく、理論が説明を与えるべき言語現象である(Ludlow 2011)。本発表は Ludlow に賛同するものであるが、彼が十分に議論を与えていない点、すなわち観察可能な判断データから如何にして現象が導き出されるのかについての分析を試みる。より具体的には、GG がデータから生み出す言語現象とは何かについて述べる。

また今述べたデータ・現象・理論の関係性は、現象をモデルと解釈して再分析されている(Teller 2010)。言語学は科学哲学において理想化の一ケースとして分析されることにも鑑み、判断データが支持する現象をデータモデルとして解釈し、その構築について論じる予定である。一般にデータモデルというと、多く得られた数量的データに対して、統計的操作を加えて得られるモデルを指すが、GG の判断データは統計的操作の対象になるようなデータとは異なる。GG におけるデータモデルを構築する操作とはある文についての構造記述を与えることであると論じる。また、そのような操作が如何にして正当化されるのかについて、実験統語論と呼ばれる一分野に目を向け考察する。

発表時間の余裕如何によっては、初期ではなく現在の極小主義的 GG におけるデータについても焦点を当てる。

主な参考文献

Bogen, J., & Woodward, J. (1988). Saving the phenomena. *Philosophical Review*, XCVII(3), 303–352.

Chomsky, N. (1955). The Logical Structure of Linguistic Theory. Ms., Harvard University and MIT (Page references are to the revised 1975 version published by Plenum, New York, NY).

Chomsky, N. (1957). *Syntactic structures*. The Hague: Mouton.

Ludlow, P. (2011). *The Philosophy of Generative Grammar*. Oxford University Press.

Teller, P. (2010). “Saving the Phenomena” Today. *Philosophy of Science*, 77(5), 815–826.